

A 市内の子ども食堂の機能分析

—スクールソーシャルワーカーの社会資源アセスメントのための試行的研究—

日本社会事業大学 内田 宏明

Functional analysis of children's cafeteria in A city

—A Trial Study for the Assessment of Social Resources of School Social Workers—

Hiroaki UCHIDA

Abstract : The purpose of this study is to clarify the development of assessment methods for children's cafeterias and the functions of children's cafeterias, and what functions can be expected when school social workers work together as local resources for supporting children from poor families. Two surveys in City A revealed that the functions of each children's cafeteria differed from organization to organization. By understanding the differences between the different functions of this children's cafeteria as a social resource assessment by school social workers, it will be possible to utilize them as social resources that meet children's needs.

Keywords : School Social Work, Social Resource Assessment, Children's Cafeteria, Child Poverty, Community Support

要旨：本研究は、子ども食堂をスクールソーシャルワーカーが貧困家庭の子どもを支援する際の地域の資源として連携を図るとき、どのような機能を期待できるのか、機能に関するアセスメント方法の開発およびその子ども食堂の機能を明らかにすることを目的とする。

A 市における 2 度の調査により、子ども食堂それぞれの機能の特徴が団体により異なることが明らかとなった。この子ども食堂による異なる機能の違いを、スクールソーシャルワーカーが社会資源アセスメントとして把握することによって、子どものニーズに対応した社会資源としての活用を図ることが可能となるであろう。

キーワード：スクールソーシャルワーク、社会資源アセスメント、子ども食堂、子どもの貧困、地域支援

1 研究目的

ソーシャルワークの機能として地域生活を支えるための社会資源をアセスメントすることの重要性がさらに高まっている。それは、クライアントの多様な生活支援ニーズに対応する支援展開の必要性からである。このことは、学校を基盤としたスクールソーシャルワーカーにとっても同様のこ

とである。しかしながら、その方法はいまだ模索中と言っているであろう。半羽は、現職のスクールソーシャルワーカーの実務テキストの中で「教育行政関係以外にも、地域には様々な社会資源があります」⁽¹⁾とし、社会資源の分類を示し、「社会資源に繋げるとしても、その前提には丁寧なアセスメントがあります」としているが、具体的なアセスメント方法は示していない。村井拓哉も、民間の子ども食堂との連携の必要性は強調しているが、その前提となるスクールソーシャルワーカーによるアセスメントについては言及していない⁽²⁾。馬場幸子は、地域における組織についてアセスメントについて言及し、「その組織内部（機関の構造、機関内の意思決定がどのようにおこなわれるかなど）」をアセスメントする必要性は主張しているが、その組織が有する機能をアセスメントすることの必要性については触れていない⁽³⁾。浜田知美は、地域と協働支援するための機能や役割として、①仲介機能②調停機能③連携機能④ケアマネージャー（ケースマネージャー）機能④社会変革機能をあげており大変意義深いだが、そもそもその協働支援の前提となる地域の機能に関するアセスメントの必要性については触れていない⁽⁴⁾。

このような状況の中で、近年の子どもの貧困問題への社会的関心の高まりとともに、地域住民を

中心とした子ども食堂の取り組みが広がっている。この子ども食堂をスクールソーシャルワーカーが貧困家庭の子どもを支援する際の地域の資源として連携を図るとき、果たしてどのような機能を期待できるのか、機能に関するアセスメント方法の開発およびその子ども食堂の機能を明らかにすることが求められているため、本研究の目的とした。

2 研究の方法

本研究においては、調査対象としてA市内の子ども食堂14か所をあげて、第1次調査において子ども食堂のスタッフ代表の方に対して、活動における全体的な状況について自由記述の質問紙調査をおこなった。その結果を踏まえ、第2次調査として同じく子ども食堂のスタッフ代表に対して、子ども食堂の機能に関する構造化されたインタビュー調査をおこない、その機能の分析をおこなった。

(1) 第1次調査

調査期間：2018年6月1日～7月31日の間

調査対象：A市内で取り組まれている14か所の子ども食堂のスタッフ代表

調査方法：質問紙調査（自由記述）

(2) 第2次調査

時期：2018年8月1日～9月30日

調査目的：子ども食堂の機能を1次調査で抽出した4つの機能ごとに質問項目を設定して結果を分析し、各子ども食堂の機能の特徴を明らかにすること。

調査対象：市内14か所の子ども食堂のスタッフ代表

調査方法：第1次調査により抽出した4つの機能に対しての質問項目を設定し、構造化されたインタビュー調査をおこなった。

(3) 倫理的配慮

第1次調査、第2次調査ともにA市子ども家庭部に承認を取り、調査内容についてはA市子ども子育て会議において確認していただいた。そのうえで、A市子ども家庭支援センター長より、A市子ども食堂連絡会に対し、調査の依頼をおこ

ない、各団体から了承を得た。記録物については、日本社会事業大学の内田研究室において施錠管理し、10年間保存する。

3 第1次調査の研究結果

(1) 質問項目

子ども食堂の運営スタッフに対して、①「子ども食堂の意義」、②「子どもの気になる姿」、③「子どもが経済的に厳しいと感じる場面」、④「運営面での困難点」について、自由記述で質問した。

(2) 調査結果

① 「子ども食堂の意義をどのような時にお感じになりますか」

① i みんなで食事する楽しさ

「全員で食事をしているとき」「子どもが調理を喜んで食べてくれる時」「大人数で食べる食事の美味しさや楽しさを子ども達が知っている時」

① ii 遊びなどの楽しさ、喜び、そして笑顔の場

「子どもの笑顔が増えたり、子ども同士の関係性が良くなったと感じる時」「子ども達の笑顔、子ども同士の楽しそうな交流の様子」「一緒に人と居ることで喜びや楽しみを経験できる」

① iii 行事・イベントなど豊かな体験の場

「家ではできない体験ができる」

① iv 地域における交流による人間関係の広がり（同世代、異世代）

「コミュニケーションに広がりが見えてきた」「月に1回だけの開催だが、手作りの食事を多様な年代の人とともに共有できる時間を持てる場になっている時」「地域の人たちと交流できる場とできるといいのでは」「核家族化による人とのつながりの貧困、地域におけるつながりの貧困から見える他者とのつながりの希薄さを感じる時」「地域交流」

① v 多様な人々と出会い・ともに居る場（障がいのあるなし、学校に行く行かないにかかわらず）

「異年齢や特別支援学校の垣根を越えて遊んでいる時」

① vi 子どもの支えとなる

「子どもの個別の事情に応じて食堂以外の支援を行う時」「子どもの進学した時。支援、役割が

見えてきた」「表情が明るくなった。進級の相談をしてもらった」「困難を抱えている子ども達が来てくれる事」「子どもの話を聴くことができる。個別に支援することができる」

㉗ 信頼関係の形成の場

「子ども達が人（学生、スタッフ）への信頼を徐々に持てるようになったこと」

㉘ 保護者の子育て負担の軽減、子育て支援

「保護者も含めて参加する事で子どもの安心感が得られる。子育ての負担を軽減する」「シングルマザーが自分だけではないと思える。母親の負担を減らすことができる。子育ての情報。資格を取って就職を考えているとき、こういうことをした等の就労関係の情報交換」

② 「子ども食堂に来る子どもの姿をみてどのよ うなことが気になりますか」

① 学校の悩み

「学校に行きたくても行けないのか、行きたくないから行かないのかわからない」、「学校でうまくいっていないのでは（いじめ等）という子がいる」があげられた。学校に行っていない子どもが子ども食堂に参加しており、それをスタッフが気にかけていることがわかる。スタッフが子どもの学校での困りごとを、子どもの姿や話の内容などから捉えている。それは、子どもが継続的に子ども食堂に参加する中でスタッフと信頼関係ができ、いじめ等学校の教員や親には伝えにくいことも子ども食堂のスタッフには伝えられると考えられる。このような時に学校の教員と子ども食堂のスタッフとのつながりがあれば、対応が必要な場合であっても相互に協力し、子どもを支えることができる。

② 孤食

「家での食事時間が遅いためお菓子で空腹を満たしていたり、家族がいても孤食であったり、コンビニ弁当を買って食べる子どもが多いこと」、「独り占めして食べる姿」、「自宅での食事を満足に食べていない様子を感じる姿」、「日曜の夜ご飯を家族で食べないのか」があげられた。このように、子ども食堂では子どもの食生活が見えてくることわかる。それは子ども食堂が食を通じた支援を主としているため、食事の様子や食にまつわる話がしやすいなど、普段の食生活が表れやすい状況であると考えられる。

③ 親子関係

「親子の関係がうまくいっていないところが見受けられる」、「大人の気を引く行為をしたり独占して遊びたがる子ども」、「親が家にいるかどうか気になる」「兄弟だけで来る子どもが多い」があげられた。「子ども食堂」という名称であるが親子で参加できる場もあるため、家庭の中以外では見えにくい親子関係を子ども食堂で捉えることができる。また、スタッフを独占しようとする子どもに関しては、親が仕事で子どもと関わる時間が少ないなどの家庭環境にあると推測される。このように、親子関係を親子のやりとりや子どもの様子から捉えやすい状況にあるということがわかる。

④ 友人関係

「グループ化していて、他の子ども達との交流が少ない」、「友達に暴言を吐いたり、嫌がらせをする」があげられた。子ども食堂には学校や学年などを越えた子どもたちが参加している。そのため学校や学年などでグループ化すると考えられる。それにより学校や地域での友人関係が見えてくる。また、友人に暴言や嫌がらせをする子どもに関しては、いじめなど友人関係での問題が考えられる。このように子ども食堂では学校や地域での友人関係が捉えられることがわかる。

⑤ 顔色や言葉遣い

「顔色の悪さ、言葉遣いがトゲトゲしい」があげられた。スタッフは普段との表情の違いや普段の言葉遣いが荒々しい子どもに対して、気にかけていることがわかる。子ども食堂の中には、少人数の子どもが参加している場所もある。子どもが少人数であると、子ども一人ひとりの表情や言葉遣いに、スタッフの目が行き届きやすいと考えられる。このことから、子ども食堂のスタッフによる子どもの学校生活や家庭生活での背景理解が期待される。

⑥ 約束事を守れない

「ルール徹底の難しさ」「子ども同士でふざけてけがをしない様に願っている」があげられた。子ども食堂のスタッフは、子どもの安全・安心を守るために子どもたちの様子を気にかけていることがわかる。ただ、多様な子どもたちが参加することからおとながルールをつくるより、子ども同士でその場の過ごし方を考えていくことが重要

である。スタッフはその環境をつくっていくことが必要だが、子どもの数が多いとスタッフの目が届きにくい。そのため、子どもを見守るボランティアスタッフの確保が必要である。また、各団体が使用している場所は手狭なところが多いため、十分な空間的な保障も必要である。その他に、参加している子どもたちの中には見守りが必要な子どももいる。そのため、不登校や発達障害に関しての一般的な理解を図るために、教育機関や相談機関との連携も必要である。

③ 「家庭の経済や環境面が厳しいと感じる場面としてどのようなことがありますか」

「夜、送っていった時に家に誰もいない。」「保護者の帰宅が遅いという子どもたちの声」、「子どものお話の中で生活状態を話す時」、「夏休み朝、昼も食べていないとの発言」、「なかなか帰ろうとせずいつまでも居たがる」、「家に帰りたがらない」である。

このように、家庭の状況をスタッフが子どもの送り迎えで捉えることもあれば、子ども自身がスタッフに伝えることもある。また、親が不在時の食生活や夏休み中の食生活をスタッフに伝えることもある。子ども食堂から家に帰ることを嫌がる様子から現在の子どもの置かれている状況が推測できると考えられる。

④ 「子ども食堂を運営する上での困難にはどのようなことがありますか」

① 行政機関、学校との情報交換、連携体制の構築が必要

本当に支援が必要な子どもたちが活動に参加するためには、子ども家庭支援センターやスクールソーシャルワーカーなど行政の関係機関と団体が情報共有できる体制がつくられていることが必要である。また、通学している子どもたちは、教員が子どもたちとほぼ毎日接しており、その中で気づく子どもたちの変化や、一方で教員では気づきにくい地域の中にいる子どもたちの様子について、学校と団体とが結びつくことで、共有することが可能である。さらに、子ども食堂をおこなっている団体同士で情報交換をおこなうことで、より質の高い支援を子どもたちや家庭に提供できるように活動方法を共有することができる。

② 会場費の補助、会場の確保

財源の確保が課題になっている現状の中で、安

定して活動を維持できるように、行政側に会場費や会場そのものを提供してもらいたい、という意見がある。

③ 調理器具、食器などの保管場所

活動の日にスタッフが家や会場以外のところから運び出す負担を減らすために、食材などを保管しておける場所を提供してもらいたい。

④ 広報

様々な家庭の子どもたちに活動に参加してもらうためには、そもそもどのような団体が、いつ、どこで活動を行っているかを知ってもらわなければならない。そのためには団体自らの広報だけでは限界があるため、行政の広報を使って周知活動を行う必要がある。

⑤ 運営費の補助

助成金や補助金をもらっている団体もあるが、全てが金銭的な補助を受けているわけではない。行政が予算を確保した上で、安定した活動を維持できるように団体に補助をしてもらいたいという意見がある。

(3) 調査分析

子ども食堂の運営スタッフに対する、「子ども食堂の意義」「子どもの気になる姿」「子どもが経済的に厳しいと感じる場面」を問う自由記述の結果を分析した。

「子ども食堂の意義」については、キーワードを抽出し、KJ法により整理分析したところ子ども食堂の機能に関する4つの枠組みが抽出された。

「子どもの気になる姿」から理解できたのは、子ども食堂は一般的に食事の提供を主な意義として考えられがちであるが、実際は、子どもの姿、表情、言動また親、友達との関係から①学校の悩み、③親子関係、④友達関係、⑤顔色や言葉遣いといった課題把握の場になっていることである。また、見守りが必要な子どもが参加している場があるため、教育機関や相談機関の連携が必要なことがわかった。

「子どもが経済的に厳しいと感じる場面」についても、エピソードの数は少なかったものの、子ども食堂のスタッフ代表の方々が背景にある貧困状況にある家庭の現状が子どもの姿に表れていると感じ取れていた。

以上を分析し、子ども食堂の機能を、「参画

性」「交差点性」「雑居性」「支援性」に整理した。

① 参画性

子どもに“居場所と出番”があることの中での楽しさを示す。地域の中に一緒にご飯を食べる場があること、友達やスタッフと遊びや行事、食事づくりなどをする場に参加できることなど、自分が受け止められる“場”に加わるという意義を示している。またその場の中で、自分のやりたいことを言ったり、食事内容や行事、あるいは運営に関する意見をいったりなど、子ども自身が参画することには、その場が自分の居場所であることを確信していくうえで大きな意義があると考えられる。

② 交差点性

子ども食堂という居場所が、地域の様々な子ども、おとなが様々な方面から集まってくる“交差点”のような場であり、ここでの交流を通して人間関係が広がっていくという意義を示している。そして、子どもにとって義務的に行かなくてはならない場ではなく、行きたいという自分の気持ちで決めることができるし、気が変わればまた行かなくてもよい。思い出した時に、ぽっとまた顔を出すことができる。行くも行かないも自由な意思に委ねられた場が地域にあるということ自体が、子どもにとって学校でもない家庭でもない、第三の居場所の保障となっている。

③ 雑居性

その場でいろいろな人と出会うことができ、いろいろな人が“居る”ことができるという多様性が保障されているという意義を示している。主催者側が参加の要件を厳格に決めて、参加者全員で同じ目標を持って同じ行動をする場とは異なる。それぞれの子がそれぞれの思いで、居場所で過ごしている。そこでは行動の評価が求められるのではなく、子どもの存在自体が受け止められるのである。

④ 支援性

子どもが本来求めている支援をその場で受けることができたり、その場からつなげていくことができるという意義である。また、保護者の方々にとっても子育てを支援する場となっている。この支援性を発揮するためには、子どもと運営するスタッフの方々との信頼関係が形成されることが第一前提となる。加えて、スタッフと相談機関や教

育機関とのつながりを有していることがとても大切である。

4 第2次調査の研究結果

(1) 質問項目

第1次調査で抽出した4つの機能に対する質問項目を設定し、続く2018年8月～9月に構造的な聞き取り調査を行い14の子ども食堂の機能分析を施行した。質問項目は各機能について4問とし、「はい」1点、「どちらとも言えない」0.5点、「いいえ」0点で評価した。

① 参画性を捉えるための質問項目

- ・子ども自身が活動内容を考え、実施していますか。
- ・子ども自身が料理やおやつを作ったり、手伝ったりしていますか。
- ・料理やおよつへの献立の希望を子どもに聞いていますか。
- ・子どもの要望で日時を調整できますか。

② 交差点性を捉えるための質問項目

- ・居場所に以前来ていた子どもが再び来ることはありますか。
- ・開始当初からのスタッフはいますか。
- ・食事以外（おしゃべりなど）のことを目当てに来ていていると思われる子どもはいますか。
- ・学校、学年、障害などを問わず垣根を超えた子どもたちの交流はありますか。

③ 雑居性を捉えるための質問項目

- ・外国にルーツのある子どもが来ていますか。
- ・学校に行っていないと思われる子どもが来ていますか。
- ・特別支援学校、特別支援学級・通級指導学級の子どもは来ていますか。
- ・子どもが自由に過ごすことができる時間はありますか。

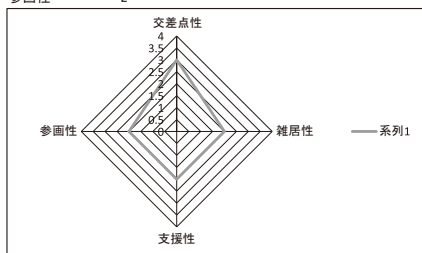
④ 支援性を捉えるための質問項目

- ・スクールソーシャルワーカーや子ども家庭支援センター、社会福祉協議会が関わっていますか。
- ・居場所活動の場以外でつながりを持てる子どもはいますか。
- ・スタッフ間での情報共有（定期的な打ち合わせなど）を行っていますか。
- ・支援が必要だと思われること（家庭や学校のこ

【圖 1】

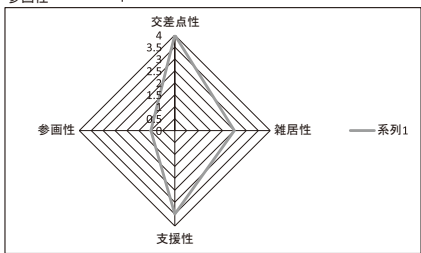
A食堂

交差点性 3
 雑居性 2
 支援性 2
 参画性 2



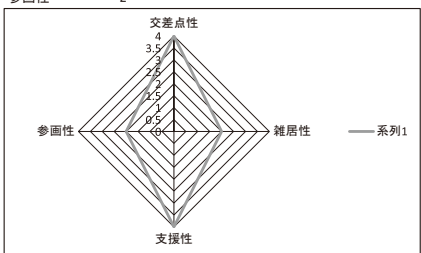
B食堂

交差点性 4
 雑居性 2.5
 支援性 3.5
 参画性 1



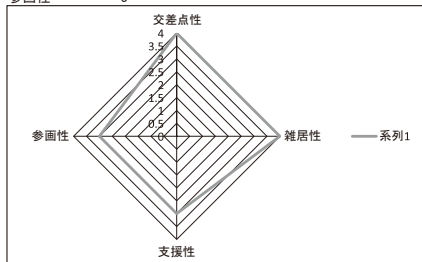
C食堂

交差点性 4
 雑居性 2
 支援性 4
 参画性 2



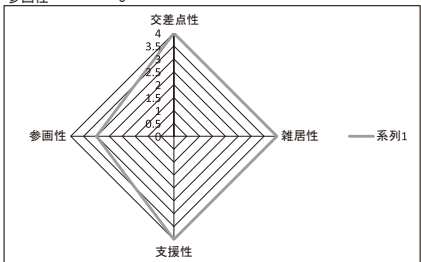
D食堂

交差点性 4
 雑居性 4
 支援性 3
 参画性 3



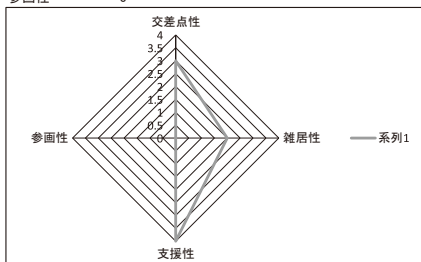
E食堂

交差点性 4
 雑居性 4
 支援性 4
 参画性 3



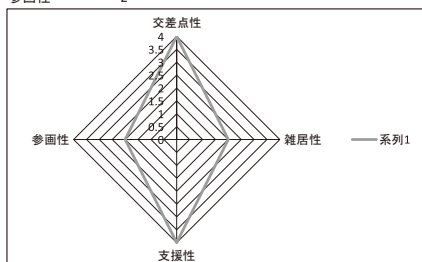
F食堂

交差点性 3
 雑居性 2
 支援性 4
 参画性 0



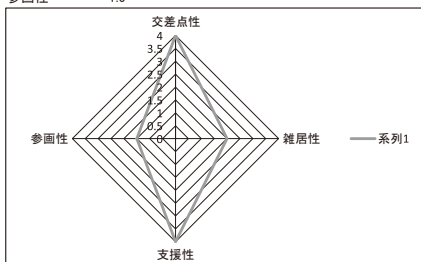
G食堂

交差点性 4
 雑居性 2
 支援性 4
 参画性 2



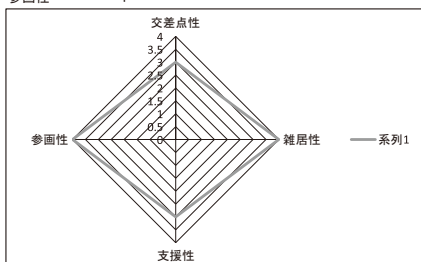
H食堂

交差点性 4
 雑居性 2
 支援性 4
 参画性 1.5



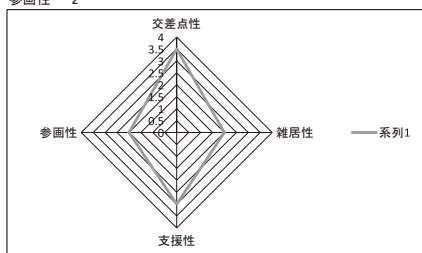
I食堂

交差点性 3
 雑居性 4
 支援性 3
 参画性 4



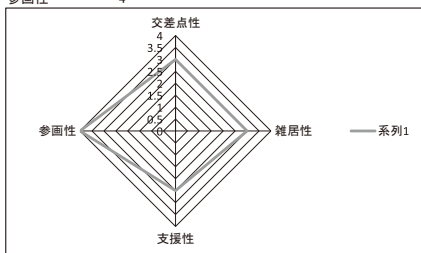
J食堂

交差点性 3.5
 雑居性 2
 支援性 3
 参画性 2



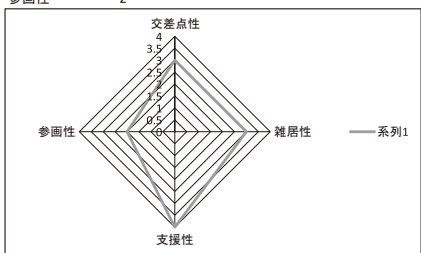
K食堂

交差点性 3
 雑居性 3
 支援性 2.5
 参画性 4



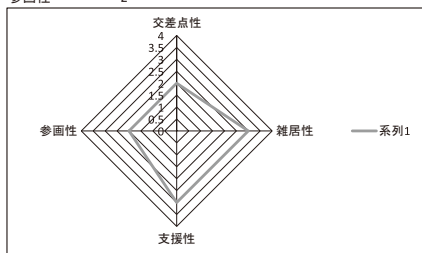
L食堂

交差点性 3
 雑居性 3
 支援性 4
 参画性 2



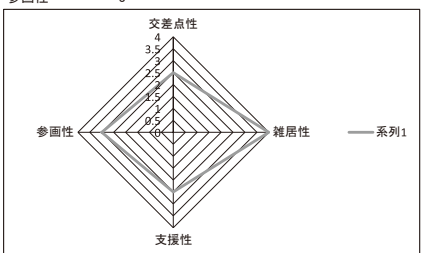
M食堂

交差点性 2
 雑居性 3
 支援性 3
 参画性 2



N食堂

交差点性 2.5
 雑居性 4
 支援性 2.5
 参画性 3



となど)を把握していますか。

(2) 調査結果

調査で得られた数値をレーダーチャートに落とし込んだ。【図1】

(3) 分析

子ども食堂は運営形態から大きな類型として、誰でもが参加できる地域開放型の子ども食堂と、支援ニーズが特定されている対象限定型の子ども食堂に分かれる。しかしながら、地域開放型の子ども食堂と、対象限定型の子ども食堂とで、機能が2分されているわけではなく、それぞれの子ども食堂が多様な機能分布を示していることが分かった。地域開放型であっても、支援性が高い子ども食堂もあれば、逆に対象限定型であっても支援性が低い子ども食堂もあった。

5 考察

筆者が別におこなったスクールソーシャルワーカーに対するフォーカスグループインタビューの分析結果⁽⁵⁾により、スクールソーシャルワーカーが子どもの貧困に対する今後の課題として、地域の社会資源を活用した地域支援体制を確立することを重視していることが明らかになっている。今回の調査研究の結果により、今期待を集めている子ども食堂の機能を分析することが可能となり、子ども食堂それぞれの機能の特徴が団体により異なることが明らかとなった。この子ども食堂により異なる機能を、スクールソーシャルワーカーが社会資源アセスメントを実施して把握することによって、子どものニーズに対応した社会資源としての活用を図ることが可能となるであろう。子どもの貧困による「関係性の貧困」状態にある場合は、地域の多くの方々が集う「交差点性」が高い子ども食堂がニーズを充足するであろう。子どもの貧困による「家庭生活のネグレクト」状態にある場合は、支援機関との連携度が高い「支援性」が高評価な子ども食堂がニーズを充足すると考えられる。

6 結論

以上の研究により、「参画性」「交差点性」「雑居性」「支援性」を地域資源のアセスメントにおける軸として設定することで、スクールソーシャルワーカーがその支援計画を立案する上で有効であることが示唆された。

しかしながら、本研究は依然試行的段階にあるもので、特に第2次調査における質問項目は充分に先行研究を精査して設定されてはいない。また、各子どもの食堂における機能の違いの要因について、第1次調査からスタッフの属性等によるものと推定されるが、今後さらに調査を進めなければ明らかにはならないと考えている。

今後、調査内容・方法をさらに検討し、地域を広げ調査を進めるとともに、スクールソーシャルワーカーの方々と地域アセスメントの研究を進めていく予定である。このことにより、スクールソーシャルワーカーが汎用しうるアセスメントツールとして開発することが可能となると考える。

注

- (1) 半羽利美佳 (2019) 「社会資源の把握①—資源一覽—」、金澤ますみ・奥村賢一・郭理恵・野尻紀恵編『新版スクールソーシャルワーカー実務テキスト』、学事出版、46-47
- (2) 村井拓哉 (2018) 「地域の人々の関係性が貧困克服のカギ」、鈴木庸裕・丹波史紀・古関勝則・佐々木千里・梅山佐和・朝日華子著『子どもの貧困に向きあえる学校づくり 地域の中のスクールソーシャルワーク』、かもがわ出版、28-39
- (3) 馬場幸子 (2012) 「マクロ実践の展開過程①マクロアセスメントからプランニングへ」、山野則子・野田正人・半羽利美佳編著『よくわかるスクールソーシャルワーク』、ミネルヴァ書房、106-107
- (4) 浜田知美 (2012) 「スクール(学校)ソーシャルワークと家庭・地域の協働支援」、社団法人日本社会福祉士養成校協会監修、門田光司・富島喜揮・山下英三郎・山野則子編『スクール(学校)ソーシャルワーク論』、中央法規、165-178
- (5) 内田宏明・福本麻紀編著『まちいっばいの子どもの居場所』2019、子どもの風出版会